

# 民間助成イノベーション

## - 制度改革後の助成財団のビジョン -

お待たせしました  
好評発売中!!

上製・カバー装 約 300 頁、A5 判、本体価格 3,400 円(税・送料別)

### 本書刊行のねらい(序章より抜粋)

おりしも今年には助成財団も含めて、わが国の公益法人制度そのものの抜本的な見直しが行われ、法制度の大幅改訂が実現した。この大きな変化の時期は、まさに自らを見つめなおす好機となるものと考えられる。そこで 2007 年現在を、わが国助成財団の歴史の中でのひとつの大きな節目ととらえ、過去数十年にわたる財団の活動を総括し、これからの行く末を占うための里程標を、本書を通して立てたいと考えた。それが本書企画の動機である。

### 各章の概略

第 1 部・第 1 章：わが国の助成財団の歴史とその定義について概観する。この章では、財団の歴史を民法成立以前の前身から現代までたどり、それぞれの時代の象徴的な事例の紹介などをとおして、助成財団という集合概念がどのように形成されてきたかを見る。

第 2 章：財団の根拠法である「民法」の百十年ぶりの改正にまで及んだ「公益法人制度改革」の経緯と、新たな非営利法人制度の中での助成財団の可能性を検討する。主務官庁による許可制度が廃止、「公益」は国が定めるという観念が払拭された。また、基本財産を一定年限で取り崩し、使命を終えたら解散するという柔軟な財団経営戦略も可能となり、助成財団は低金利の時代においても今まで以上に大きな役割を果たす可能性もひろがってきた。

第 3 章：助成財団の助成先の多くが大学等の研究者であるという実態に鑑み、助成金の受け手側である大学に注目し、学術研究と助成財団のかかわりについて検討する。国による科学技術振興への重点投資が進められたことによる民間財団の相対的地位の低下という現実と、それを超えて、なお国の資金とは異なる独自の存在意義を主張できるという根拠について考察する。

第 4 章：助成プログラムについて取り上げる。「寄付行為」等の枠内でどのような助成プログラムを時代の要請に応じて具体化するかは、財団の裁量にゆだねられており、この

助成プログラムの創造と経営こそが財団の存在意義の根幹をなすともいえる。この章では、原田積善会、トヨタ財団、サントリー文化財団の 3 つを事例として検討する。

第 5 章：NPO 法の成立経過を軸に、ポスト日本型福祉国家への変化という文脈で市民活動を支える理念について明らかにし、あわせて今後の市民活動を支える主体としての助成財団のあり方を論じる。

第 6 章：「メセナ」ということばに代表される芸術文化支援に関する助成財団について記述する。メセナは 1980 年代末に、普及した概念で、この時期に設立された財団は、芸術文化支援という未踏の領域で多様な先駆的な試みを重ねてきた。それは、これからの財団活動の多様化に向けての理論的な根拠ともなる。

第 7 章：わが国の助成財団の多くを生み出した企業の側に視点を置き、企業の社会貢献活動の系譜とそこでの助成財団の位置づけを考察する。近世の商人の社会貢献から最近の CSR まで時代ごとの経営思想の変遷をたどり、これからの時代における企業財団のあり方を考察する。

第 8 章：「助成」というものを、資金提供者の意図と、資金提供を得て行われる研究や活動とを媒介する機能としてとらえ、その多様な類型を考察する。助成財団はあくまで多様な類型の中のひとつの形でしかない。

第 9 章：さらにそれを受けて、市民が社会の主体として自ら公益活動を担うというこれからの時代の中での助成財団としての可能性と課題を検討する。

第 2 部・第 10 章：従来助成財団センターが「助成財団の現状」として紹介してきた、資産規模や事業費規模、その他事業分野・形態などの指標にもとづく最新の統計を示す。第 11 章：これまで各財団が助成対象としてきた様々な個別課題についての分析を試みる。

この他、当センター設立に携われた林雄二郎氏、山岡義典氏の特別寄稿も掲載している。



### 目次

|        |                             |
|--------|-----------------------------|
| 巻頭言    | フィランソロピー実践のための七つの鍵(林雄二郎)    |
| 第 1 部  | 「助成財団」とは何か - その思想と、歴史 -     |
| 序章     | 助成財団とは何か(久須美雅昭)             |
| 第 1 章  | 助成財団の歴史(久須美雅昭)              |
| 第 2 章  | 公益法人制度の大改革(市川拓也)            |
| 第 3 章  | 研究助成財団のイノベーション(加藤 毅)        |
| 第 4 章  | 助成プログラムの創造と経営(牧田東一)         |
| 第 5 章  | 市民活動の台頭と NPO 法人制度(松原 明)     |
| 第 6 章  | メセナと芸術助成財団(片山正夫)            |
| 第 7 章  | 企業の社会貢献活動の系譜(伊木 稔)          |
| 第 8 章  | 資金提供者のニーズと助成のスキーム(今田 忠)     |
| 第 9 章  | 助成財団をとりまく環境変化と助成財団の課題(今田 忠) |
| 第 2 部  | 資料編                         |
| 第 10 章 | 助成財団の基本統計(湯瀬秀行)             |
| 第 11 章 | 助成対象課題の分析(久須美雅昭)            |
| 特別寄稿   | 助成財団は新しい時代をどうむかえるか?(山岡義典)   |

〔編集・発行〕(財)助成財団センター  
当センターまで FAX もしくは E メールにて  
お申し込み下さい。  
FAX : 03-3350-1858  
E メール : pref@jfc.or.jp

書店からもお申し込みいただけます。  
発売 : 株式会社松籟社 (TEL : 075-531-2878 )  
ISBN 978-4-87984-851-2 C0030